

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年5月31日(火)

### 《マリアの賛歌 一何の値打もない私を道具として委ねますー》

マリア様がイエス様を宿した時代、女性の結婚適齢期は13歳~14歳くらい、男性は15歳くらいでした。今で考えれば、まだ子どもです。そして、まだ女性として成熟していない田舎の少女のままのマリア様の前に、大天使ガブリエルが御父の使いとして現れました。幼いマリア様は、大天使ガブリエルのメッセージを受け取ります。しかし、受け取った後もどのくらいとまどい、どのくらい不安な気持ちでいたか、十分に想像ができると思います。

今日の福音(ルカ 1・39-66)では、マリア様が聖霊の導きによってエリザベトを訪問します。マリア様は、エリザベトが神様の力で妊娠していることを聞いていました。そしてエリザベトと同じようなことが自分の中にも起こっていることを感じ、エリザベトに会っているいろいろなことを聞きたかったのでしょう。だからエリザベトのもとへ行ったのです。そして、迎えてくれたエリザベトの姿、エリザベトを通して話される言葉を聞いて「私は幻を見ているのではなく、これは本当のことなのだ。」という聖霊の体験ができたのでしょう。

それからマリア様は歌を歌います。日本語では「マリアの賛歌」、ラテン語では「マグニ・フィカト(Magnificat)」と呼ばれる歌です。その「マリアの賛歌」を公式的な祈りとして毎日捧げている人々がいます。それは、修道者、聖職者、神学生たちです。毎夕の祈りの時に、必ずこの「マリアの賛歌」を唱えます。この「マリアの賛歌」の核心に流れているメッセージはただ一つです。それは、「何の値打もない私を適して、あなたは本当に大きいみわざを見せてくださいました。」というメッセージです。神学生も司祭も修道者も、「私は、み前では何の億打もない、本当に何もない存在です。しかし、このように悲惨な存在として生まれた私を通して、あなたがみわざを行おうとするのならば、私は自分自身をその道具として委ねます。」という告白をするために、毎晩この祈り、この歌と一緒に唱えるのです。

私たちにとっても、「マリアの賛歌」の心は何よりも必要なものです。この歌が身につけば、へりくだる心、まことの謙遜がよく分かると思います。神様の前では何の値打もない存在としてこの世に生まれ、生きて来て、これからどのような生き方をすべきかを考えるメッセージではないかと思います。

皆様、私たちはある意味では何も分かりません。何時間が後のことさえ分かりません。だから委ねる心が何よりも必要なのだと思います。そしてその委ねる心というのは、マリア様が体験した心だと思います。「私は何も分かりませんが、何の値打もない私をあなたが選んでなさろうとすることに委ねます。あなたを信じます。」という心が信仰ではないかと思います。

ありがとうございました。